

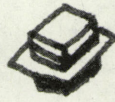
卷頭言

自己物語の始まり

田中智志

私たちは、「自分の人生」といえる物語を作りながら、また、それを演じながら生きています。「自己物語」と呼ばれているこの自作自演の物語は、自分にまつわるさまざまな思い出、すなわち生まれ育った家、遊んだ場所、通った学校、共に暮らした家族、共に語らった仲間、共に働いた同僚、そして出会い、別れ、死別、秘密など、過去のさまざまな出来事から構成されています。

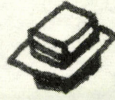
自己物語の中の過去の出来事は、たんに古い順に並べられているのではなく、その主人公である〈私〉の観点から、因果的に結びつけられています。たとえば「あの時の彼の言葉で、自分は進路を決め、いまの自分がある」といわれるように、過去の出来事は、現在の〈私〉を生み出す契機として意味づけられています。



こうした自己物語は、一つのストーリーです。言い換えるなら、客観的現実というよりも、一つのフィクションです。実際には「あの時の彼の言葉」は、進路を決めるうえで大した意味をもたなかったのかも知れないが、振り返っているうちに、いつの間にか、その言葉が重い意味をもつようになっていきます。私たちは、いわば後追的に過去の事実を価値づけ、脚色しています。

こうした（私）の自己物語は、他者の自己物語と交換できません。自己物語は、一人ひとりに固有な物語であり、代替不可能です。私たち一人ひとりがかけがえない存在であるのは、私たち一人ひとりが固有の自己物語を生きているからです。たとえば、経済学的にいえば同等の貧しい家に育とうとも、その境遇を力強く生きる活力に変える人もいれば、その境遇を自暴自棄の理由に変える人もいます。経済学的な同一境遇の意味は、当人の自己物語によって変わっていきます。

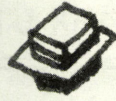
日々の経験も、自己物語によって意味づけられています。たとえば、自分を否定的にとらえ、誰も信用できないと考えて生きていけば、誰かに自分の誤りを指摘されたという経験は、自分のプライドが傷つけられる経験であり、その人を嫌い、遠ざける理由になるでしょう。しかし逆に、自分を肯定的にとらえ、人は人と共に生きる存在であると考えて生きていけば、同じ経験は、自分を高



める契機であり、その人に感謝し、人間関係を深めようとする理由になるでしょう。人生物語の違いによって、人の言動は大きく変わっていきます。

人が、いつごろから自分の自己物語をつくりだすのか、はっきりわかっているませんが、その始まりは、幼児期の子どもに見いだすことができそうです。人の記憶は、早ければ、二、三歳くらいにまで遡行できますが、そのおぼろげな記憶、記憶ともいいがたい痕跡が、自己物語の礎いしすえとなる過去の出来事なのでしよう。

自己物語の礎となる記憶はさまざまですが、その一つは、夢中で遊んだという経験、一心不乱に何かに取り組んだという記憶です。そうした経験（記憶）は、濃密で充実感に満ちています。それは、誰かに指示されていやいややったという遊びではなく、自分がやりたいと思っていることを、思う存分にやったという記憶です。ここでは、自我がいわば溶解してしまい、自分が遊びと一体化する重要な記憶として、心に刻まれていきます。もちろん、どんなことに夢中になったのか、遊びの内容の多くは、忘れられてしまいます。しかしそれでも、その時の解放感・充実感いしすえは心の奥底に残り、この世界への肯定感情を生み出していきます。



もう一つの記憶が、誰かに支えられた、大切にされたという記憶です。ひと
言で言えば、他者との深い関係性（心を通わすつながり）の記憶です。他者と
の深い関係性は、心の奥底に少しづつ積み重なり、のちに生成する自律性を支
える礎になっていきます。その事實は、関係性の中を生きている時にはわかり
ません。長じて子ども時代を振り返る時、初めて意識化されます。たとえば、ふ
るさとに久しぶりに帰ってきた時に感じる何とも形容しがたい安堵感は、この
関係性が意識化される時に生まれる感覚でしょう。あるいは英語圏の人々が
「マイホーム」「ホームタウン」という言葉を感じる、懐かしく心安らかな思い
も、この関係性が意識化される時に生まれる感覚でしょう。

私たちの人生が自己物語によって基本的に支えられていると考えるなら、幼
いころの経験は、人生物語の基礎であり、実際に生きる人生の礎です。夢中に
なつてやった遊びの経験、誰かに無条件に愛されたという経験——こうした経
験は、なるほど、直接に有能さ・卓越性に結びつかないものですが、そうした
能力を支える土台です。心の強さ、気概、気高い志といった、本当に人生を肯
定する力は、この土台に支えられていると言つてよいと思います。幼児教育が
極めて重要なのは、そこで人生の真正な礎が築かれるからだと思ひます。

（山梨学院大学大学院教授）